

遺跡からみた国の成り立ち



2018
那珂川町教育委員会

はじめに

那珂川町は、昭和31年に南畑村、岩戸村と安徳村が合併してできました。そして、平成30年10月には町から市へ大きく変わろうとしています。日本の歴史をさかのぼると、約2,200年前に集落がまとまって「クニ」ができ、さらにそれらがまとまって「国」ができあがっていく時代がありました。当時の人々にとっては、大きな社会の変化だったことでしょう。今回は、その変化があった弥生時代から古墳時代に焦点を当て、本町の遺跡から歴史とその文化の様子を見てみたいと思います。この冊子が、本町の魅力を感じてもらえるきっかけとなっていただければ幸いです。

弥生時代の「クニ」

縄文時代（約13,000年前～約2,500年前）の人々の生活は、動物の狩猟や木の実などの採集が中心の生活でした。しかし弥生時代（約2,500～1,700年前）になると、大陸から伝わった稲作などの農耕が中心の生活へと変化しました。このため人々は同じ場所で長く暮らすようになり、集落は少しずつ大きくなりました。そして各地の集落では、一般の人々と違って墳丘墓を造り、棺に副葬品を多く入れて埋葬するような権力を持つ首長（有力者）たちが現れます。そして集落がまとまり、「クニ」ができ始めます。この頃（約2,100年前）の様子が、中国の歴史書『漢書』の「地理志」に、倭人（日本人のこと）が100余りの小国（クニ）をつくっていたと書かれています。そして弥生時代の終わり頃（約1,800年前）の様子について、中国の歴史書『三国志』の「魏志倭人伝」に、クニ同士が次第にまとまり、伊都国、奴国や邪馬台国といった30ほどのクニがあったと書かれています。ここでは、奴国を構成する集落であった安徳台遺跡群、その眼下にある安徳原田遺跡群や出土遺物をご紹介します。

安徳台遺跡群

本遺跡は、福岡平野の最奥部に位置します。阿蘇山の火砕流で形成され、平野部との比高差が約30mもある台地上に広がり、遺跡の広さは約10万㎡あります。遺跡の調査された範囲は一部ですが、弥生時代中期から後期初めの集落、中期後半の墓地が発見されました。集落では130軒以上の住居跡が見つかり、その中でも2号住居跡は、中期中頃としては日本最大級の大きさで、青銅器の鋳型や勾玉などが出土しています。

集落に伴う墓地では、甕棺墓が10基見つかり、このうち2号と5号甕棺墓からは、多くの副葬品が出土し、この地を治める首長のお墓であることが分かりました。

このように、本遺跡は天然の要害ともいえる台地を利用した大規模な集落です。その集落内に大型住居が建てられていたこと、そして墓地に首長の甕棺墓が埋葬されていたことから、本遺跡が奴国の拠点となる重要な集落だったことがわかります。



▲上空から見た安徳台遺跡群

台地の広さは裾野まで含めると22万5千㎡あります。

●は2号住居、●は2号甕棺の位置です。



◀2号住居

弥生時代中期中頃(約2,200年前)の円形住居です。大きさは、直径14m以上あり、安徳台遺跡群で確認された大型住居の中でも飛び抜けています。2号住居では、勾玉、管玉、青銅器の鋳型、銅鏃、鉄器、鉄片、石剣、石包丁の未成品、それらの加工や仕上げに使われたと思われる砥石、作業台などの遺物が見つかっています。



◀^{まがたま}勾玉(2号住居出土)

上質な滑石で作られています。はじめは上部に穴を開けて使用されていました。しかし壊れたため、下部に穴を開けて再度使用していたと思われます。(長さ約2.3cm)



◀^{くだたま}管玉(18号住居出土)

韓国で産出されるアマゾナイト(天河石)で作られています。この時期には珍しい物で、日本と朝鮮半島の海を越えたつながりを示すものです。(長さ約8mm)



◀^{せいどうき}青銅器の鋳型(2号住居出土)

滑石片岩で作られた、細形銅剣の鋳型です。住居に伴い出土した鋳型としては、日本最古級です。(幅約4.8cm)



◀^{どうぞく}銅鏃(18号住居出土)

青銅製の三稜鏃です。茎は短く変形した六角形をしています。住居からの出土は、これが日本初でした。(残存長約2.3cm)



◀有力首長墓

大きな墓こう(4m×5m、写真左)から6基の甕棺が見つかりました。一番深い位置に2号甕棺(写真右)があり、副葬品に大量の貝輪、ガラス製勾玉3個、大量の管玉、塞杆状製品2個、鉄剣1本、鉄戈1本が納められていました。これほどの副葬品は他を圧倒しており、被葬者が有力な首長だったことを示しています。



▲貝輪(腕輪)

1つのゴホウラ貝で、1個しか作れない貴重な腕輪です。これが2号甕棺に43個以上も副葬されていたことは、被葬者の地位の高さを示しています。(長さ13~15cm)



▲塞杆状製品(左)勾玉(右上)管玉(右下)

これらは装飾品として使われました。塞杆状製品(左)は髪飾りに、ガラス製の勾玉(右上)と管玉(右下)は紐で組み合わせて首飾り等にして、被葬者は身に着けていたのでしょう。



◀鉄剣(左)・鉄戈(上)

どちらも武器です。被葬者の生前の権力や地位を示すため、棺外に納められたと考えられます。

(鉄剣約38cm、鉄戈約29cm)

安徳原田遺跡群

本遺跡は、安徳台遺跡群から北東の眼下に広がる遺跡群です。調査例は多くありませんが、弥生時代の遺構として中期の甕棺墓1基と、後期の幅3mもある大きな溝1条が確認されています。この溝から土器がまとまって出土し、その中には表面が赤く塗られた筒形の器台も見つかっています。この筒形の器台は、お祭りに使われる特別な土器だったと考えられています。さらに本遺跡では、埋められた銅矛が12本出土していることから、弥生時代後期に、この場所で特別なお祭りが行われていたと考えられています。



▲昭和62年度調査区全景

現在のライスセンター建設前の発掘調査の様子です。調査区上辺の中央から斜め左下にのびる大溝から、たくさんの土器が出土しました。



◀大溝

幅が約3mもあり、土器がまとまって出土しました。土器の中には、お祭りに使ったと思われる筒形器台もあります。



◀筒形器台(左)と壺(右)

どちらも大溝から出土しました。筒形器台の表面は赤く塗られ、普通の土器とは違う仕上がりになっています。(高さ左約60cm、右約22cm)

見つかった銅矛

本遺跡で出土した銅矛は、広形銅矛と呼ばれるもので、祭器としてお祭りに使われるようになり、また埋められるようになります。これが埋められた状態で、明治の中頃に12本見つかりました。現在6本は所在がわかっており、残りは不明ですが、そのうち1本は図面が残っています。



▲藤野家所蔵



▲伊都国歴史博物館所蔵1号(左) 2号(右)



広形銅矛

銅矛は、弥生時代初めに細形が出現して以降、中細形、中広形そして広形へ大型化し、武器から祭器になります。そして何らかの目的により、祭器である銅矛を土中に埋めるようになります。このことは、同じく大型化し祭器となる銅剣や銅鐸と共通しています。安徳原田遺跡群で見つかった銅矛は、長さが約80~90cmの広形で、祭器として使われ埋納されました。



▲銅矛の部位名称

古墳時代の「国」

古墳時代（約1,700～1,400年前）には、前期初めに畿内^{きんない}のクニが統合されヤマト王権が誕生しました。中央集権国家としての「国」の成立です。そして各地のクニの首長^{ちくぞう}へ、ヤマト王権との同盟の証に鏡が送られ、さらに首長たちのお墓として前方後円墳の築造が許されます。この古墳文化によって造られた古墳は、町内では450基確認されており、そのうちの8基が前方後円墳です。ここでは、古墳時代前期の妙法寺2号墳や安徳大塚古墳、中期の貝徳寺古墳などの古墳と出土遺物をご紹介します。

妙法寺2号墳

妙法寺2号墳は、那珂川左岸の標高約50mの丘陵上に造られた前方後方墳です。全長は18mと小型で、古墳の形をつくる周溝^{しゅうこう}が前方部で途切れるという特徴があります。この特徴は、山陰地方で造られる前方後方墳と共通しています。後方部の中心に埋葬された木棺^{さんかくぶちしんじゆうきよう}（矢印）から、三角縁神獣鏡という銅鏡が見つかりました。古墳の造られた時期は、古墳時代前期と考えられています。



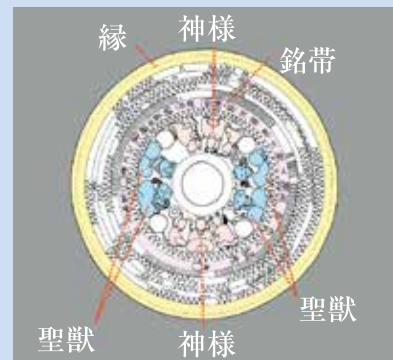
▲妙法寺2号墳の全景



◀三角縁神獣鏡（町指定文化財）

面径21.9cmの銅鏡です。縁の断面が三角形になっていることが特徴で、裏面に六体の神様と四体の聖獣が描かれ、それらの外側にお祝いの文が書かれた六神四獣鏡という種類です。これと同じ型は、万年山古墳（大阪府枚方市）などでも見つっています。本古墳出土の鏡は、重要な資料として町の有形文化財に指定されています。

三角縁神獣鏡の解説図▶



エゲ古墳

エゲ古墳は、那珂川右岸の平野と接する標高約40mの丘陵先端に位置し、とても見晴らしの良い場所に造られた方墳です。一辺が約18m、高さ約4.5mで二段に造られ、まるで上部が削られたピラミッドのような形です。墳頂の中央には割竹形木棺^{わりたけがたもつ}が埋葬され、木棺の中に銅鏡や剣などの副葬品が納められていました。墳丘の一部は削られていましたが、木棺は幸いにも盗掘を受けていなかったため、ほぼ完全な状態で見つかり、当時の有力者の葬送儀礼を知る貴重な資料となりました。古墳の造られた時期は、古墳時代前期と考えられています。



▲エゲ古墳の全景

古墳の中央で見つかった割竹形木棺（矢印）の中から、鏡、剣、玉類、工具、武器が確認されました。



◀副葬品出土状況

被葬者の頭の位置に鏡(矢印)・剣・玉類が、棺の両端にやりがんなや鉄斧などが置かれていました。鏡の下に木片が残っていたため、鏡は木箱に入れて棺に納められていたと考えられています。



◀四獣形鏡(町指定文化財)

面径13cmの銅鏡で、仿製鏡という日本で作られた鏡です。裏面の中央にはひもなどを通す紐があり、その周りに小さな突起の乳が四つあります。乳と乳の間には、摩滅しているのでもわかりにくいのですが、四体の竜のような聖獣が描かれています。

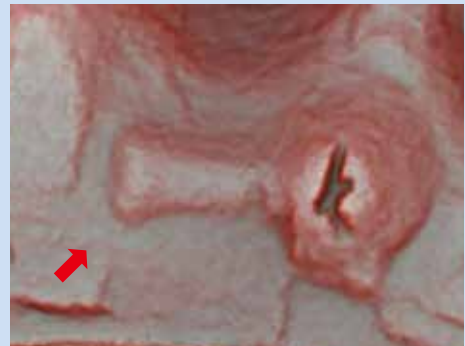
あん とく おお つか こ ふん

安徳大塚古墳 (国史跡)

安徳大塚古墳は福岡平野の最奥部に位置し、標高約55mの見晴らしの良い丘陵上に造られた前方後円墳です。今は木が生い茂っているので、遠くから見ると古墳の姿はわかりませんが、一部盗掘を受けているものの古墳の形はきれいに残っており、真上から見ると柄鏡のような形をしています。古墳の全長は64mあり、墳丘の前後に造られた濠も含めると81mになります。本格的な発掘調査は行われていないので、詳しいことはわかりませんが以前行われた福岡県教育委員会による確認調査で、埋葬施設は礫床粘土槨である可能性が高く、古墳の造られた時期は古墳時代前期と考えられています。まさにその頃の典型的な形を残す古墳であり、那珂川町への古墳文化の伝播を考える上でとても重要な遺跡です。平成28年3月7日に国史跡に指定されました。



昭和46年撮影、九州歴史資料館提供



▲安徳大塚古墳の全景

写真は古墳の南側半分の樹木を伐採し、図の矢印の方向から撮影したものです。後円部(写真奥)は高さ約6m、直径約35m、前方部(写真手前)は高さ約2m、幅約20mあります。また川原石を使った「葺石」と「埴輪」が確認されました。

▲赤色立体地図



◀葺石(左)、埴輪(右)

葺石(右)とは、墳丘が崩れないように斜面に敷かれる石のことです。石の大きさは人頭大くらいで、川原石が使われています。埴輪とは、古墳の墳頂部や裾部などに置かれる土製品です。壺形埴輪の口縁部(右上)は、縁が外側に大きく開いており、復元すると、口径が29cmになりました。壺形または円筒埴輪の底部(右下)は、復元すると底部径が16.5cmになると考えられています。表面には朱と呼ばれる赤色の塗料が塗られているのが特徴です。



貝徳寺古墳

貝徳寺古墳は、梶原川右岸の平野部に造られた前方後円墳です。墳丘が大きく削られていたため、発掘調査で確認されるまで、その存在は知られていませんでした。昭和56年度の調査で馬蹄形の周溝が見つかり、全長54mの前方後円墳だとわかりました。馬蹄形の周溝を持ち、前方部が大きく開くのは、畿内で造られる前方後円墳と同じ特徴です。石室はすでに消滅していましたが、周溝の中に大量の埴輪が残っていました。埴輪は北部九州では見つかることが少ないので、どれも貴重な資料となりました。その中でも蓋形埴輪は、九州では唯一の完全な形で残っている例です。古墳の造られた時期は、出土した須恵器から古墳時代中期と考えられ、妙法寺2号墳や安徳大塚古墳以降も、この地に有力者がいたことがわかりました。



▲貝徳寺古墳の全景



▲蓋形埴輪

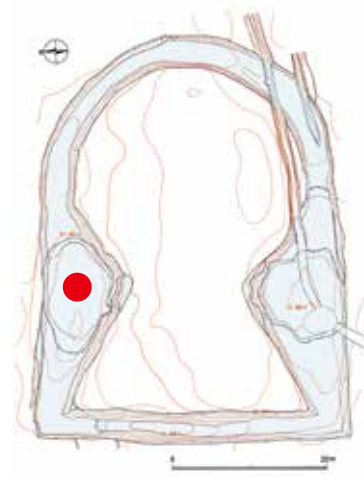


▲形象埴輪 人物形(左)、家形(奥)、壺形(右)



◀周溝内の遺物出土状況

東から見たくびれ部(図の●)の様子です。周溝の中から、たくさんの埴輪のかけらが出土しています。

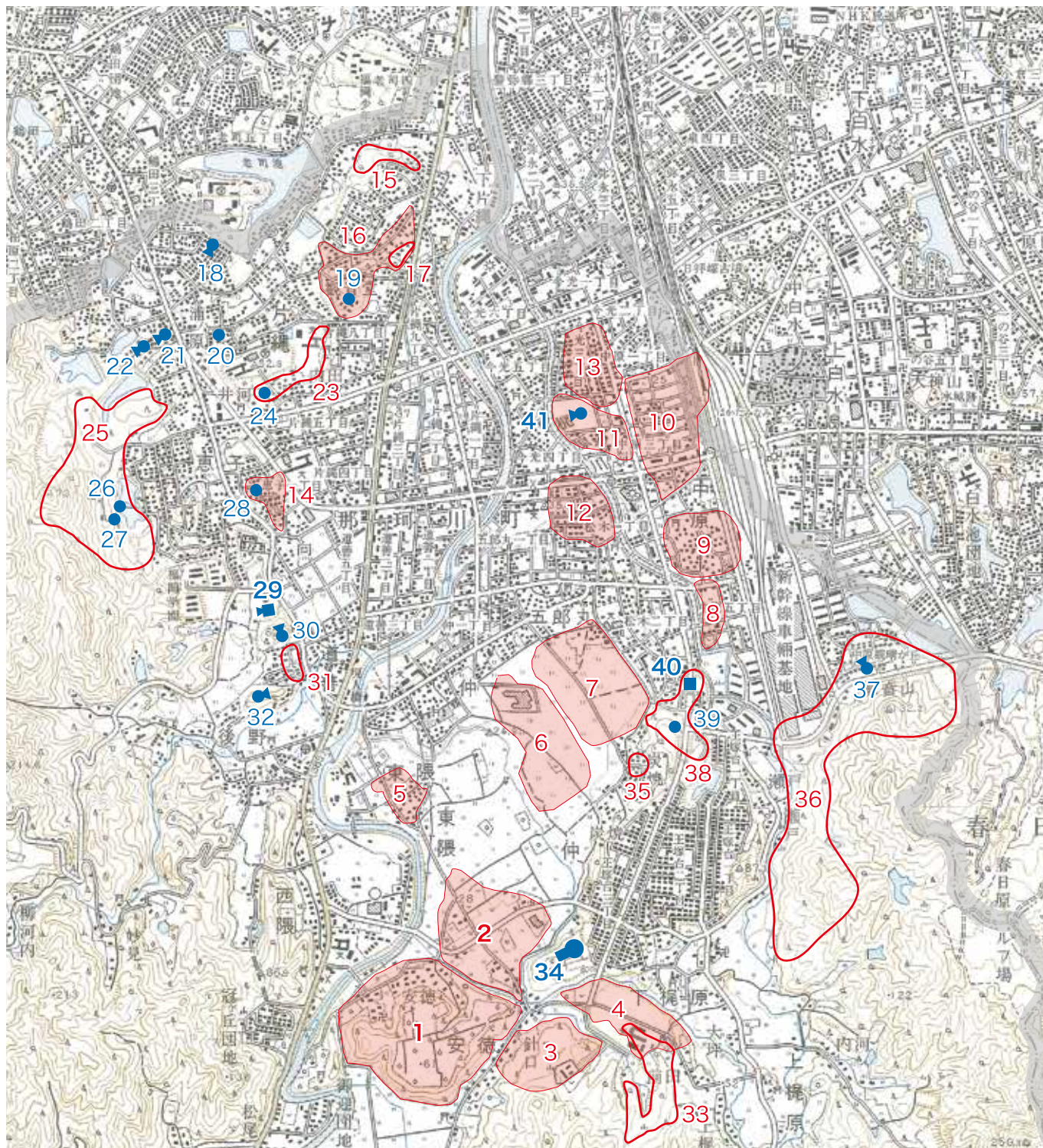


▲貝徳寺古墳測量図

おわりに

今回紹介した遺跡を見ていくと、弥生時代中期には安徳台遺跡群で、首長墓や大型住居が見つかった奴国を構成する拠点集落が営まれます。その後、後期の首長墓や集落は見つかっていませんが、安徳台の眼下にある安徳原田遺跡群で、特別なお祭りをする時に使われる広形銅矛が出土しています。これらのことから、弥生時代中期から終わりまでの間に、奴国の拠点集落が継続して営まれたとわかります。そして古墳時代に入ると、那珂川兩岸の平野を見下ろす各丘陵上に妙法寺2号墳やエゲ古墳が造られた後、安徳台近くの丘陵上に、前期の典型的な前方後円墳の安徳大塚古墳が造られます。さらに中期になると平野部で、馬蹄形の周溝と大量の埴輪をもつ貝徳寺古墳が造られます。いずれの古墳も畿内の影響が強くみられることから、被葬者は当時畿内と関係のある人物だった可能性が考えられます。これらの遺跡がこの地域に継続して営まれていることから、奴国や、その後の勢力にとって、福岡平野を治めるために欠くことの出来ない地域だったということがわかります。

以上のように、本町の魅力は、福岡平野でクニから国へと変化していく様子がわかる「日本の歴史が見えてくる」遺跡を、数多く残すことです。これらの遺跡を大切に守っていくこと、そして活かしていくことが、今後さらに求められます。



- | | | | |
|--------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 安徳台遺跡群
あんとかだい
あんとかはらだ | 12. 松木遺跡群
まつぎ
いまみつ じあまり | 23. 井河古墳群
い こう | 34. 安徳大塚古墳
あんとかおつか |
| 2. 安徳原田遺跡群
あんとかはらだ | 13. 今光・地余遺跡群
いまみつ じあまり | 24. 井河1号墳
い こう 1 号墳 | 35. 炭焼古墳群
すみやき |
| 3. 龍頭遺跡群
りゅうとう | 14. 恵子遺跡群
え こ | 25. 丸ノ口古墳群
まるのくち | 36. 観音山古墳群
かんのんやま |
| 4. 平蔵遺跡群
へいざう | 15. 野口古墳群
のぐち | 26. 丸ノ口V群5号墳
まるのくち V 群 5 号墳 | 37. 観音山中原I群1号墳
かんのんやま 中原 I 群 1 号墳 |
| 5. 東隈遺跡群
ひがしくま | 16. 観音堂遺跡群
かんのんどう | 27. 丸ノ口VI群2号墳
まるのくち VI 群 2 号墳 | 38. カクチガ浦古墳群
かクチガうら |
| 6. 仲遺跡群
ちゆう | 17. 観音堂古墳群
かんのんどう | 28. 恵子若山古墳
え こ 若山 古墳 | 39. カクチガ浦10号墳
かクチガうら 10 号墳 |
| 7. 前田遺跡群
まえだ | 18. 浦ノ田1号墳
うらのた 1 号墳 | 29. 妙法寺2号墳
みょうほうじ 2 号墳 | 40. エゲ古墳
えげ |
| 8. カイチ遺跡群
かいち | 19. 権現塚古墳
ごんげんづか | 30. 妙法寺1号墳
みょうほうじ 1 号墳 | 41. 貝徳寺古墳
けいとくじ |
| 9. 中原塔ノ元遺跡群
なかばらとうのもと | 20. うめぼし山古墳
うめぼしやま | 31. 油田古墳群
あぶらでん | |
| 10. 中原・ヒナタ遺跡群
なかばら | 21. 小丸1号墳
こまる 1 号墳 | 32. 大万寺前古墳
だいまんしまえ | |
| 11. 今光・宗石遺跡群
いまみつ むねいし | 22. 小丸2号墳
こまる 2 号墳 | 33. 平蔵古墳群
へいざう | |

※太字は冊子で紹介した遺跡

那珂川町の文化財 26 遺跡からみた国の成り立ち 2018

発行：那珂川町教育委員会
福岡県筑紫郡那珂川町西隈1丁目1番1号

印刷：有限会社 成光社
福岡市南区大楠1丁目29番33号

これまで調査された那珂川町の主な弥生時代と古墳時代の遺跡分布図です。

(赤色は遺跡群または古墳群、青色は古墳)

この図は国土地理院刊行の地形図福岡南部・不入道を使用しました。